

数 学 ・ 国 語 (100点 60分)

【注 意 事 項】

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 出題科目、ページ及び選択方法は、下表のとおりです。

出題科目	ページ	選 択 方 法
数 学	3 ~ 9	左の2科目のうちから1つを選択し、 解答してください。(国語は裏表紙から① となります)
国 語	③ ~ ⑳	

- 3 試験中に問題冊子の印刷不明瞭、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
- 4 解答用紙には解答欄以外に次の記入欄があるので、監督者の指示に従って、それぞれ正しく記入し、マークしてください。

※解答用紙の注意事項もよく読んでからマークしてください。

① 氏名欄

氏名を記入してください。

② 解答科目欄

解答する科目を一つ選んで () 内に記入し、さらにその下の ○ にマークしてください。マークされていない場合又は複数の科目にマークされている場合は、0点となります。

③ 受験番号欄

受験番号の下3桁を記入し、さらにその下の □ にマークしてください。正しくマークされていない場合は、採点できないことがあります。

- 5 解答は、解答用紙の解答欄にマークしてください。例えば、10 と表示のある問いに対して ㉓ と解答する場合は、次の(例)のように解答番号10の ㉓ にマークしてください。

(例)

解 答 番 号	解 答 欄
1 0	<input type="radio"/> a <input type="radio"/> b <input checked="" type="radio"/> c <input type="radio"/> d <input type="radio"/> e <input type="radio"/> f <input type="radio"/> g <input type="radio"/> h <input type="radio"/> i <input type="radio"/> j <input type="radio"/> k <input type="radio"/> l <input type="radio"/> m <input type="radio"/> n <input type="radio"/> o

- 6 問題冊子の余白等は適宜利用してかまいません。
- 7 試験終了後、問題冊子は持ち帰ってください。

国語

解答箇所は 1 ～ 29 です。

問題一、次の文章を読んで、後の問い(問1～10)に答えなさい。

(ア) セイホク部の町マンチエスターを中心とする綿織物工業の展開が、イギリス産業革命のきっかけであった。それは、世界で最初の産業革命ないし **X** であった、ともいう。しかし、そもそも産業革命とは、どういうことであったのか。その原因は何だったのか。また、その結果はどうだったのか、というような点については、歴史学上、複雑で難しい論争が無数にあって、解決しそうにない。

じつさいのところ、いずれの問題も、人びとの世界観や価値観にかかわる問題であるため、(イ) エイエンに答えが出ないものなのかもしれない。ただ、近年は、イギリスがもはや世界のなかでも重要な工業国ではなくなっているという現実もあって、「世界で最初の産業革命」の意義が問い直され、イギリス経済の本質は、むしろ地主やシテイ(注1)の金融関係者や保険業者のように、非工業的な分野——(注2) ジェントルマンの価値観が優越した分野——にあったのだとする、「ジェントルマン資本主義」の見方が有力になってきている。つまり、イギリスにとって、産業革命の意味は、以前にくらべて低くみられるようになってきているのである。

それにしても、世界で最初に起こったイギリスの産業革命をめぐるのは、同時代からはじまり、いまだに決着のつかない **Y** 論争がいくつもある。そのひとつが、「生活水準論争」として知られる論争である。

生活水準論争とは、イギリス民衆の生活水準が、産業革命によって上がったのか、下がったのか、という論争である。今日では、産業革命、すなわち **X** は、すべての低開発国の指導者たちがこぞって希求していることであるので、それが国民の「生活水準を下げた」かもしれない、ということとは想像しにくいかもしれない。

しかし、そもそも A 「産業革命」という言葉をつくり、そのような「できごと」を歴史のなかに見ようとした最初の人びと、たとえば、例のカール・マルクスの友人であったフリードリヒ・エンゲルスやロンドンにできた巨大スラム、イーストエンドの改良運動をしていたオックスフォード大学のアーノルド・トインビーらは、こうした巨大なスラム、いいかえれば、膨大な「貧困の蓄積」が、どこからきたのかという疑問から、結局「産業革命」という考え方にいたったのであった。

とくに、社会改良をめざしていたトインビーにとつては、毎日 (a) 目の当たりにしている貧困と疾病と犯罪に満ちあふれたロンドンのスラム、イーストエンドが、いつ、どこから生まれたのが問題であった。どのように考えても、そんなものが、中世の「旧き、よき、イギリス」にあったはずはない。とすれば、このような貧困のかたまりのような町は、中世から、彼自身の生きた一九世紀後半までのあいだのどこかで生まれたのだ。それは、人びとが (ウ) ソウゴに助け合って生活していた中世の「(エ) ボツカテキな農村」から、人びとが騒音と犯罪の都市に追いやられた結果である。人びとが、ボツカテキな農村から追い出され、都市の「暗く、惨めな工場」での長時間労働に曝されることになったのは、「産業革命」とでもいうしかない社会の激変によつたのだ、とトインビーは考えた。これが、論争の歴史上、「悲観説」としてしられるトインビーらの結論であった。それこそ、産業革命という言葉が、歴史の用語として本格的に使われた、最初の例でもあった。《 i 》

「ボツカテキな農村」にくらべて、人びとの生活が悪化したのは、「工場」という労働環境の問題だけではない。「生活水準」論争において重要な指標としてあげられたもののひとつが、

I

トインビーやその後の「悲観説」派の議論では、産業革命によって、人びとの食生活は著しく悪化したとされた。同時代からあつたこの激しい論争のおかげで、 B 産業革命時代の労働者階級の食事については、かなり詳しいデータが残っている。

食生活史からいえば、イギリス産業革命とは、要するに都市化と生活の商業化のことであつた、といえそうである。「産業革命」が急激に起こつた結果、イギリス人の四分の三が「農村」に住んでいた一七世紀から、ものの百年ほどのあいだに、逆に、イギリスの人口の四分の三は「都市」に住むことになつたのである。人口の重心が農村から都市に移つたことで、食生活の環境はまったく変わった。《 ii 》野菜や乳製品を含めて、自給できる食べ物はほとんどなくなり、何もかも、おカネで買うもの

になつた。食べ物だけでなく、調理用の燃料でさえ、共有地で拾ってくるようなことはむずかしくなつて、石炭を購入する必要が生じた。石炭に火をつけるのは容易なことではないが、そのために使う、燃えやすい「たき付け」もまた、買う以外になつた。共有地で家畜を買い、小屋のまわりで野菜をつくつた小屋住み農やハズバンドマン (ごくふつうの農民をさす言葉で、「夫」を意味する英語の語源でもある) の生活は、ロンドンやマンチェスターのような都会では、ありえなかつたのである。

C 生活文化の商業化の傾向は、産業革命以後も一貫して進行しており、今日われわれの生活は、ほとんど商業化され尽くしている。ホームズパン (「家庭でつくる織物」の意味) は、遠い昔の記憶ではない。お母さんが子供の着物をつくることも、まずなくなっている。いまでは、子供の保育、教育などのサービスのようなものから、夕食のお総菜にいたるまで、かつては家庭内で自給されていたものが、保育園やスーパーマーケットで購入されているのだ。《 iii 》したがって、収入の少ない労働者にとつては、産業革命は大変な災厄であつたこと、「悲観説」派のいうとおりである。

しかし、産業革命はまた、一部に豊かな中産階級をも生み出した。イギリスでは、 D 真に豊かな人たちは、ジェントルマンとよばれた資産家階級であつたから、中産階級というのは、収入のランクでいうとその下に位置する、産業革命時代の工場経営者などのことである。産業革命は、ジェントルマン階級やこうした中産階級の人びとにとつては、生活水準の著しい上昇を意味した。

彼らの場合、とくに食生活については、朗報があつた。産業革命がほぼ完成しかけていた一九世紀はじめ、ナポレオンがモスクワ遠征に失敗し、ワテールローでも敗れて、最終的に没落したことである。一世紀以上にわたつて断続的に戦われたイギリスとフランスの戦争は終結し、イギリスの覇権が世界的に確立した。対仏戦争のあいだ、イギリスは、フランスを「共通の敵」とすることで、イングランド人とケルト系の人びと (ウェールズ人、スコットランド人、アイルランド人) とを強引にひとつの「国民」として、その結集を図つてきたが、そのような必要性は、とりあえず消滅したのである。「フランス料理」とフランス人シェフが、 (b) 大手をふつて、イギリス上・中流階級の生活のなかに戻つてきた。

しかし、庶民の食生活はそのようなものではなかつた。じつさい、あらゆる娯楽と料理などのぜいたくを禁じたクロムウェル

時代に続いて、「イギリスはまずい」という、イギリスの食生活についての悪評が、いよいよ定着したのは、この時期である。

《 iv 》

—川北稔『世界の食文化—¹⁷イギリス』による—(出題の都合上、一部中略した箇所がある)

- (注)
- 1 シテイ：イギリスのロンドンにある地区。古くから金融や商業の中心地として栄えた。
 - 2 ジェントルマン：イギリスの社会的な支配者階層。
 - 3 カール・マルクス：ドイツの経済学者・哲学者(一八一八～一八八三)。
 - 4 フリードリヒ・エンゲルス：ドイツの経済学者・哲学者(一八二〇～一八九五)。
 - 5 スラム：都市にみられる過密集住地域。
 - 6 アーノルド・トインビー：イギリスの経済学者・社会改良家(一八五二～一八八三)。
 - 7 クロムウエル：オリバー・クロムウエル。イギリスの軍人、政治家(一五九九～一六五八)。

⑥

問1、傍線部(ア)～(エ)の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。

【解答番号 1 3 4】

(ア) セイ|ホク

1

- ① 自分のセイ|メイを名乗る。
- ② セイ|ゼツな戦いを繰り広げる。
- ③ イツ|セイに走り出す。
- ④ 年号をセイ|レキに直す。

(イ) エイ|エン

2

- ① 漢詩をロウ|エイする。
- ② 事業にエイ|ゾク性を求める。
- ③ 要人をゴ|エイする。
- ④ セイ|エイ部隊を派遣する。

(ウ) ソウ|ゴ

3

- ① 時計がショウ|ウゴを告げる。
- ② ゴ|バン目状に区画する。
- ③ 彼は政界のオオ|ゴシヨだ。
- ④ 男女がコウ|ゴに並ぶ。

(エ) ボツ|カ|テキ

4

- ① サン|ビカの楽譜を買う。
- ② 責任をテン|カする。
- ③ 機械がカ|ドウする。
- ④ ヨ|カをもてあます。

⑦

問2、傍線部(a)・(b)の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。

【解答番号

5

・

6

】

(a) 目の当たりにしている

① じかに接している

② 当たり前としている

③ 気に留めている

④ 見過ごしている

5

(b) 大手をふって

① なりふり構わずに

② 人目をはばからずに

③ 幸いとばかりに

④ あつという間に

6

⑧

問3、本文中の空欄 X・Y に入る最も適当な語を、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。なお、二つある空欄 X には同じ語が入る。

【解答番号

X

7

・

Y

8

】

X

① 生活文化

② 都市化

③ 工業化

④ 商業化

Y

① 新奇な

② 深刻な

③ 英明な

④ 頑迷な

問4、次の文は本文の一部である。これを入れるのに最も適当な箇所は本文中の空欄①～④のうちどれか。次の①～④のうちから一つ選びなさい。

【解答番号

9

】

一八世紀末、イギリスに起こった産業革命は、このような生活の商業化という、きわめて大きな動きの歴史的起点であった。

① ≪ i ≫

② ≪ ii ≫

③ ≪ iii ≫

④ ≪ iv ≫

問5、傍線部A『産業革命』という言葉をつくり、そのような『できごと』を歴史のなかに見ようとした」とあるが、なぜか。その理由として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

【解答番号

10

】

⑨

① 農村が劣悪な環境に変わった原因を明らかにしようとした結果、人びとに貧困をもたらした工場での長時間労働を改善するべきだと考えたから。

② 都市部の人びとが蓄積する貧困に悩まされる原因を明らかにしようとした結果、中世のどこかで生まれた最初の貧困地域の事例を研究するべきだと考えたから。

③ 都市部で貧困地域が拡大し続ける原因を明らかにしようとした結果、かつて貧困をもたらした非工業分野の産業における技術革新を参照するべきだと考えたから。

④ 巨大な貧困地域が発生した原因を明らかにしようとした結果、農村から都市への人口移動をもたらした社会の急激な変化に着目するべきだと考えたから。

問6、本文中の空欄

I

に入る最も適当な言葉を、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

【解答番号

11

】

- ① 食生活であった可能性が議論されている
- ② 食生活であったのではないかといわれている
- ③ 食生活であったことは「悲観説」派に不利だったかもしれない
- ④ 食生活であったことはいうまでもない

問7、傍線部B「産業革命時代の労働者階級の食事」の説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

【解答番号

12

】

- ① 食べ物や調理用の燃料を自給できる農村部と自給できない都市部とで労働者間の経済的格差が拡大し、食事の内容にも現れていた。
- ② 食べ物や調理用の燃料を入手するには購入による方法しかなかったうえ、労働者の収入は少なかったため、苦しい食生活を強いられた。
- ③ 食べ物や調理用の燃料を購入する十分な収入がない中で自給をせまられたため、野菜や乳製品を得られず、栄養不足の食事であった。
- ④ 食べ物や調理用の燃料を都市部の労働者が大量に購入したために価格が高騰してしまい、自給できる野菜中心の食事となっていた。

問8、傍線部C「生活文化の商業化」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

【解答番号

13

】

- ① 生活のためのものやサービスについて、都市化の進展に伴って、家庭で自給するだけでなく家庭の外部にも供給するようになり、商業活動が活性化していくこと。
- ② 母親が子供の保育や教育を通じて家庭で自給してきたものやサービスについて、人口が多い都市部を中心に家庭外の商業的活動で模倣されるようになり、文化的多様性が失われていくこと。
- ③ 生活する上での必要を満たすためのものやサービスの購入が常態化することによって、家庭で自給するための習慣や知識が失われ、商業活動を通じた入手手段に限られていくこと。
- ④ 人口が都市部に集中し、家庭にもものやサービスを供給するための市場が都市部を中心に拡大したため、商業的な競争が激化し、新しいづくり手が参入する余地がなくなっていくこと。

問9、傍線部D「真に豊かな人たち」についての説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

【解答番号】 14

- ① 産業革命を通じて生活水準を大きく高めたうえ、食生活の面ではイギリスとフランスの戦争の終結に伴ってフランスの食文化も享受するようになった。
- ② 産業革命を通じて新しい社会階層として台頭し、戦争から逃れたフランス人シエフを雇用することで、より高い水準の食生活を享受するようになった。
- ③ 産業革命を通じて資産を蓄積し、ジェントルマン階層の支援を享受して国民としての結集を図り、食文化をはじめとする生活水準の上昇を牽引する存在になった。
- ④ 産業革命を通じて富を増やし、イギリスの上・中流階級に同化した生活水準を享受しながら、イギリスの世界的覇権を支えてナポレオンの没落を招く存在になった。

⑫

問10、本文の内容に合致しないものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

【解答番号】 15

- ① 産業革命に伴う貧困問題は同時代からすでに議論の対象となっており、生活水準論争を引き起こしていた。
- ② イギリス料理への悪評の根拠の多くはクロムウェル時代よりも産業革命時代にあると筆者は考えている。
- ③ 産業革命で農村から都市部に移住した労働者が、小屋住み農やハズバンドマンのような生活を送ることは困難であった。
- ④ イギリスにとって産業革命の重要性の評価は、イギリス経済にとっての工業の重要性と連動しているといえる。

問題二、次の文章を読んで、後の問い(問1～9)に答えなさい。

全員一致ではなく、多数決による評決を認めても、結果は本当に変わらないのか。実際の裁判データを基にする分析は制度上難しい。しかし模擬陪審裁判を(ア)ジッした研究が発表されているので、その一つを検討しよう(Nemeth, 1987)。

評議前に各人の意見を尋ね、それに応じて六人ずつの陪審員グループを合計三七組作った。一九組では四人の多数派が有罪、二人の少数派が無罪を支持し、残りの一八組では逆に、多数派四人が無罪、少数派二人が有罪の立場になるよう組み合わせた。評議を二時間させたところ、多数派が無罪を支持していた一八組のうち一六組は全員一致で無罪になった。少数派の意見が勝り、途中で流れが変わったのは一組だけ、そして残りの一組は全員一致に至らなかった。ところが、有罪多数派と無罪少数派が評議した一九組に関しては、異なる結果が出た。七組が有罪、七組が無罪、そして残りの五組は意見が分かれたままだった。

つまり、有罪と無罪の意見が混在する場合、無罪優勢の状態が評議を通して有罪に至る可能性は低いが、逆に、有罪優勢が覆されて最終的に無罪判決が出る可能性は高い。《i》≧評議の途中で無罪の方向に変化しやすい傾向は一般的であり、他の研究でも確認されている。何故だろうか。

⑬

推定無罪の原則を思いだそう。有罪と無罪の判定は同じ価値をもたない。《ii》≧裁判所は、検察側の主張する有罪と、弁護側が訴える無罪のどちらが妥当で説得力があるかを判断するのではない。有罪決定の瞬間まで被告人は無罪だ。被告人が有罪か無罪かどうかをゼロから判断するのではない。無罪と推定される人間に対して、そうではなく有罪だと判断を変更するに十分な材料があるかを吟味するのだ。

I。疑いが残る場合は無罪だ。これが推定無罪というX原則であり、それはどの国でも変わらない。だから英米の裁判で、有罪はguilty、無罪はnot guiltyと言ふ。innocent(無実)とは言わない。それはフランスでも同様であり、無罪はnon coupable(「有罪ではない」)だ。

立証責任が検察にある以上、被告人を有罪に処すためには、犯罪仮説の正しさを示すと同時に、弁護側が提示する他の筋書きをすべて却下する必要がある。それに対して弁護側は、検察の仮説を崩す確かな材料をたった一つ提示できれば十分だ。評決

は、有罪と無罪のどちらを支持する者が多いかを判定するのではない。有罪支持者の数が規定に達するかどうかだけが問題だ。
《 iii 》 評議が進み、様々な検討が加えられるにつれて、仮説に綻びが見える可能性が高まる。《 iv 》 したがって、全員一致に至るまで議論を続けず、^A 多数決で判決を決めると、有罪率が高くなる危険がある。
全員一致と多数決にはもう一つ大切な違いがある。多数決では、判決に対する信頼度が劣る。評決に至る過程は明かされない
ので、何人の陪審員が実際に同意したのかは外部に漏れない。しかし、全員一致ではなく、過半数あるいは三分の二の賛成で十分だと知る以上、判決への国民の信頼度は下がるだろう。^B 多数決と全員一致の判断の質的違いに関して、^{注1} 小浜逸郎が重要な指摘をしている。

多数決原理というのは、本来、過去にあった事実の価値を突き止めるためではなく、私たちが未来に直面してどう振舞うべきかを決定するためにあるのである。したがって、立法府である国会が、この原理を採用しているのは、きわめて妥当だというべきである。

ところが、司法の正義を貫く原理は、すでに起きてしまった過去が、本当はどういう性格のものであったのかを究明するところにある。

多数決は単に優勢な意見・解釈にすぎない。しかし全員一致の決議内容は、議論を尽くして最終的に至った解答だ。社会のシユルクズあるいは人民を体現する代表が確信をもって行き着いた結論、これ以外にはないという答えだ。判決への揺るぎない信頼を維持する上で、どちらの方法が優れているかは明白だ。多数決と全員一致の違いは単なる量的な問題ではない。判決の **Y** という ^a 虚構が維持される上で、両者は意味が大きく異なるのである。

裁判官だけで判決を下していた時代は評議内容が密室に閉ざされていた。また、同じ訓練を受けて思考様式が均一化した裁判官の間で、判断の大きなずれはなかった。しかしこれからは多様な価値観を持つ市民が参加する。裁判官が抱く印象が少しずつ社会に ^ウ シントウしていくだろう。

過半数の賛成で判決が決まる。それは半数近くの意見が無視されるという意味だ。裁判官による誘導は避けられない。どんなに用心しても、また誠実な態度で接しても、権威を帯びる専門家によって、素人市民はまちがいなく影響される。裁判官全員が有罪を支持すれば、裁判員六人のうち二人が賛成するだけで有罪が確定する。死刑になるかも知れない。あとの四人はどう思うだろうか。自分の意見は反映されなかったと裁判員に悔いの残るケースは必ず出る。確かに、評議内容に対する守秘義務はある。しかし、裁判員を経験する人数が増えるにしたがって、裁判に対する信頼が揺らぐ可能性は否定できない。

陪審員を二人から六人に減らしても実質的違いがないと米国最高裁は判断した。二人の陪審員が一〇対二の評決をしても、六人の陪審員が五対一の評決をしても、どちらも八三%対一七%の比率だ。同じ結果ならば、陪審員が少ない方が経費節約できてよい。しかし ^C この単純な計算は誤っている。陪審員を減らすと、社会の少数派意見が判決に反映される可能性が低くなるからだ。

第一に、陪審員選定の際に、少数派層の代表が少なくとも一人含まれる確率が下がる。ある案件で住民の九割が賛成し、残りの一割が反対すると仮定しよう。反対派が陪審員になる確率はどうかだろう。あるいはアメリカ合衆国のような多民族社会において、一〇%の人口比率を持つ少数派集団がいて、彼らの意見が判決に反映される確率を考えてもよい。二人の陪審員を抽選で選定し、その中に少なくとも一人は少数派が含まれる確率を計算すると七二%になる（二人の中に一人も少数派が含まれない確率は0.9の12乗だから、それを1から引けばよい）。しかし陪審員が六人で構成されるならば、その比率は四七%に下がる（六人の中に一人も少数派が含まれない確率は0.9の6乗であり、それを1から引く）。これは非常に大きな差だ。

第二に、少数派が陪審員全体に占める割合は同じでも、二人中の二人と、六人中の一人では少数派が置かれる心理状況がまったく違う。ソロモン・アッシュ^{注2}が行った有名な実験を例に説明しよう。二つの図があり、その一方には約二〇センチの線分（基準線）が一本描いてあり、もう一方には異なった長さの三本の線分がある。基準線と同じ長さの線分を、数メートル離れた位置から選ぶよう被験者に指示する。線分三本の長さはかなり違うので通常はまちがえない。しかし、数人のサクラが口裏を合

わせて誤答を選ぶと、それに影響されて被験者は判断を誤る。比較を二回繰り返すと、被験者全体の七五%が少なくとも一回はサクラにつられた。判断総数に対する割合で見ると、影響の確率は三三%だ。明らかな誤答でも、他の全員が一致して正しいと判断すると、それに抗して自らの意見を主張するのは想像以上に難しい。

しかしこのような影響が起こるのは、(b) 長いものには巻かれるというように、単に影響源が多数派だからではない。アッシュは先ほどのように大多数のサクラに誤った答えを選ばせながら、サクラのうち一人だけは異なる回答をするよう実験状況を変更した。被験者にとっては、他の参加者の意見が分裂した状況を意味する。この場合、大多数のサクラが同じ回答を維持しても、その影響力は弱くなり、サクラに影響される回数は全体の一割程度に留まる。

この時、サクラの一人が正しい答えを選ぶ場合でも、また他のサクラよりもっと誤った答えを選ぶ場合でも、多数派の影響力は同様に減少する。つまり、自分と同じ立場を支持する他者がいるかどうかが重要なのではない。また影響源の多数性が問題なのでもない。(E) イキョウする情報源が一つに絞られるために、被験者の判断が影響を受けるのである。

陪審員二人の中に少数派が二人いる場合と、六人のうち一人だけが少数派の立場を主張する場合は、多数派が行使する影響力に格段の差がある。単なる算術的思慮から米国最高裁は陪審員数の変更を承認したが、社会・心理場が行使する磁力の中で生きる人間の判断は、そのような単純な発想では捉えられない。

—小坂井敏晶『人が人を裁くということ』による—(出題の都合上、一部中略した箇所がある)

(注) 1 小浜逸郎：日本の評論家(一九四七〜二〇二二)。

2 ソロモン・アッシュ：アメリカの心理学者(一九〇七〜一九九六)。

問1、傍線部(ア)〜(エ)の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①〜④のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。

〔解答番号 16 19 〕

(ア) ジッシ

16

- ① 社会のフクシに貢献する。
- ② 植物からユシをとる。
- ③ シイテキに解釈する。
- ④ 学校のシセツを改修する。

(イ) シュクズ

17

- ① 盛大にシュクガ会を開く。
- ② 地図のシュクシヤクを確かめる。
- ③ ゲシュク先で夕飯を食べる。
- ④ 聴衆がセイシュクになる。

(ウ) シントウ

18

- ① 著作権シンガイを訴える。
- ② パスポートをシンセイする。
- ③ 台風で床上にシンスイする。
- ④ 膝のクッシン運動を行う。

(エ) イキョ

19

- ① イガン退職する。
- ② 勇気あるコウイを称える。
- ③ 神にイケイの念を抱く。
- ④ 老人ホームをイモンする。

問2、傍線部(a)・(b)の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。

[解答番号]

20

21

(a) 虚構

- ① 虚実が入り混じったもの
- ② 存在しないとされているもの
- ③ 想像上にしかない作られたもの
- ④ 想像が具現化したもの

20

(b) 長いものには巻かれる

- ① 悪に染まることも時には必要である
- ② 勢力の強いものに迎合する方が得である
- ③ 争いは極力避けるべきである
- ④ 自分の考えに固執するべきではない

21

18

問3、本文中の空欄 X・Y に入る最も適当な語を、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。

[解答番号]

X

22

Y

23

X
Y

- ① 平和的
- ② 定言的
- ③ 便宜的
- ④ 普遍的
- ⑤ 絶対性
- ⑥ 中立性
- ⑦ 透明性
- ⑧ 可変性

問4、次の文は本文の一部である。これを入れるのに最も適当な箇所は本文中の空欄①～④のうちどれか。次の①～④のうちから一つ選びなさい。

[解答番号]

24

議論の結果、有罪よりも無罪に傾きやすい理由はここにある。

- ① ① ≧ i ≧
- ② ② ≧ ii ≧
- ③ ③ ≧ iii ≧
- ④ ④ ≧ iv ≧

問5、本文中の空欄 I に入る最も適当な言葉を、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

[解答番号]

25

- ① 必要なのは有罪の立証のみであり、無罪を立証する必要はない
- ② 必要なのは無罪の立証のみであり、有罪を立証する必要はない
- ③ 必要なのは有罪の立証か、無罪の立証のどちらかである
- ④ 必要なのは有罪の立証と、無罪の立証の両方である

19

問6、傍線部A「多数決で判決を決めると、有罪率が高くなる危険がある」とあるが、なぜか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

【解答番号】 26

- ① 全員一致になるまで議論する場合と比べて、弁護側が提供する材料が批判的に検討される傾向があり、検察側の犯罪仮説を崩すことが難しくなるから。
- ② 全員一致になるまで議論する場合と比べて、陪審員一人一人の責任感が希薄になり、検察側の犯罪仮説をうのみにしてしまう可能性が高まるから。
- ③ 全員一致になるまで議論する場合と比べて、検察側が提示する犯罪仮説の検討が不十分になり、それを反証できなくなってしまう可能性が高まるから。
- ④ 全員一致になるまで議論する場合と比べて、弁護側が検察側の犯罪仮説を崩せるだけの材料を提示しづらくなり、立証責任を果たすのが難しくなるから。

②0

問7、傍線部B「多数決と全員一致の判断の質的違い」とあるが、この違いについての筆者の考えの説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

【解答番号】 27

- ① 多数決は未来に直面した人々が司法の場で過去の事実の価値的判断を行う際に適した原理であり、過去の事実の究明にとどまりがちな全員一致の判断の不足を補う原理である。
- ② 多数決は過去の事実の性格を明らかにする際に適した原理であるが、司法の場で過去の事実の究明を行うには正確性が不十分であり、司法への信頼を維持するうえでは全員一致の判断の方が適当である。
- ③ 多数決は未来の行動を決定するために適した原理であるが、司法の場では過去の事実の究明に適した全員一致の判断の方が、司法への信頼を維持するうえで適当である。
- ④ 多数決は未来の行動を国民全体が決定する際に適した原理であるが、司法の場では少数で過去の事実の究明を行うため、より確信のもてる全員一致の判断の方が適当である。

②1

問8、傍線部C「この単純な計算は誤っている」とあるが、筆者はなぜそう考えるのか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

【解答番号】 28

- ① 同じ評決となる場合でも、陪審員の人数が多い方が、少数派層が陪審員として選定される確率が高いうえ、多数派層が少数派層の意見に与える影響力が弱まるため、陪審員の人数は判決に質的な影響を与えるから。
- ② 同じ評決に見えたとしても、陪審員の人数が少ないと買収などにより操作されるリスクが高まるうえ、多数派層が少数派層の意見に与える影響力が強まるため、陪審員の人数は判決に質的な影響を与えるから。
- ③ 陪審員の人数が多い方が少数派層が陪審員になる可能性が高まるうえ、多数派層が少数派層に対して行使する影響力が可視化しやすくなるため、陪審員の人数は司法制度への信頼に影響を与えるから。
- ④ 陪審員制度にかかるコストは陪審員の人数とは関係がなく、陪審員の人数が減り少数派層が陪審員として選定されにくくなるため、陪審員の人数は司法制度への信頼に影響を与えるから。

22

問9、本文の内容に合致するものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

【解答番号】 29

- ① アッシュが行った三本の線分の長さを問う実験は、多数決と全員一致の判断の質的な違いを明らかにした。
- ② 裁判員制度が定着するにつれ、裁判官の思考様式が均一化していることが露呈し、司法制度への信頼が揺らいでいる。
- ③ 実際の裁判データにおいても、有罪と無罪の意見が混在する場合、推定無罪の原則により無罪が出る可能性が高い。
- ④ 陪審員選定の際に考慮される少数派の例に、意見の差異だけでなく、民族的な差異に基づくものも挙げられている。